北海道価値創造パートナーシップ会議 in 網走
~新たな北海道総合開発計画に向けて~

日時　平成 27 年 5 月 20 日（水）14：00~16：00
場所　オホーツク・文化交流センター 2 階 大会議室

Ⅰ議 事

1. 開会
2. 出席者紹介
3. 国土交通省北海道局説明
   ・新たな北海道総合開発計画に向けて
4. 出席者による意見発表
   【テーマ：『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けた環境整備、対流促進』（サブテーマ）人材の育成・活用)】
   ①ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介
   ②日頃の活動を踏まえたご意見
5. 意見交換
6. 閉会

Ⅱ　出席者（順不同・敬称略）

澤田 和宏　　国土交通省　北海道局長
横田 玲子　　国土交通省　北海道局　企画調整官
橋本 幸　　国土交通省　北海道局　企画調整官
岡部 和憲　　国土交通省　北海道開発局長
今 日出人　　国土交通省　北海道開発局　開発監理部　次長
山岡 敏彦　　国土交通省　北海道開発局　網走開発建設部長

有田 敏彦　　国立大学法人北見工業大学社会連携推進センター　教授
上野 真司　　NPO 法人森のこだま　代表・ランプの宿森つべつ　支配人
黒瀧 秀久　　学校法人東京農業大学生物産業学部 学部長・オホーツク実学センター長
後藤 菜生子　株式会社知床らうすリンクル　代表取締役
新保 元康　　札幌市立発寒西小学校　校長
大黒 敦子　　食を考える協議会星火塾　代表　【当日欠席】
三木 亨　　てしかがえこまち推進協議会　UD 部会長
道山 マミ　　合同会社大地のリンゴ　代表社員

Ⅲ　議事

１．開会

今：

只今より「北海道価値創造パートナーシップ会議 in 網走~新たな北海道総合開発計画に向けて~」を開会いたします。お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。私この会議の進行を担当いたします、北海道開発局の今と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日の会議でございますが、北海道内各地域の課題解決や活性化に日頃からご活躍されている方々からご意見等をいただき、新たな北海道総合開発計画の立案に生かすとともに、関係者相互に協力会計構築の促進を図ることを目的として開催させていただいております。本日の会議はマスコミを含め一般の方々にも傍聴いただいております。また本日の資料ですが資料 1 から資料 9 となっております。議事録につきましては後日、国土交通省のホームページで掲載することを予定しておりますのでご承知いただきたいと思います。最初に国土交通省を代表いたしまして澤田局長から一言ご挨拶を申し上げます。

澤田局長：

国土交通省北海道局の澤田でございます。北海道価値創造パートナーシップ会議 in 網走の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。皆さま本日はご多忙の中、当会議にご出席を賜りましたことを感謝申し上げます。また平素より私ども国土交通行政の推進に対しまして多大なご理解とご協力を賜っておりますことをこの場をお借りしまして重ねて感謝申し上げます。さて現在政府ではご案内のとおり、地方創成というのが最重要課題になっておりまして国土交通省としても昨年 7 月に公表させていただきました、国土のグランドデザイン 2050 というものがありまして、それを受けて今、国土形成計画の改定に着手しているというところでございますし、政府全体といたしましても、まち・ひと・しごと創成本部の中で具体的な施策をどう進めていくのかという議論がなされているところでございます。北海道でございますが、北海道開発のビジョンをお示しいたします北海道総合開発計画でございますが、平成 20 年に策定された現行の第 7 期が進行をしている最中でございます。北海道を巡りましては、例えば観光でございますと、インバウンドのお客様が大変増えているというのがマスコミでも最近よく言われるところではございますけれども、政府としては 2020 年に向けてインバウンドのお客様 2,000 万人を目指そうというお話をしている中で、北海道がその中で寄与して貢献することが非常に求められております。また北海道の強みであります、一次産業、農林水産業の充実に加えて農山漁村の振興というものがこれまで以上により一層重要になっていくという状況になってございます。こういった状況の変化、展開を踏まえまして本年 1 月 30 日に国土審議会の北海道開発分科会に国土交通大臣を呼んで新たな計画に向けた諮問をさせていただき北海道経済連合会の大内会長に部会長し

ていただいている計画部会で非常に熱心にご審議をしていただいております。来るべき 10 年これもよく言われておりますように、急激な人口減少、少子化、今までに例のないような高齢化社会を迎えるという環境の中で、地域の生き残りを賭けた重要な期間になると思っております。一方で来年 3 月に函館まで新幹線が延びるということで将来に向けて起爆剤、トリガーになる、そういったファンクションになる 10 年でもあるのかなというふうに思っております。このために国土のグランドデザイン 2050 と申し上げましたけれども、新たな計画は 10 年間を見据えておりますけれども、2050 年という中長期的なところを見据えながら新たな計画に取り組んでいきたいと思っております。北海道の価値創造、長いスパンで考えたときに世界水準の価値を満たす北海道になっていけたらいいのかなと思います。そのためにはいろいろなリソースがありますが、特に今日は人材の育成をテーマに設定しておりますけれども、人を大きな財産、人が輝く地域社会の形成といったことに向けて頑張っていきたいなと思っております。新たな計画の策定に際しましてはなるべく地域の皆さんの声をなるべく聞かせていただきたいということで北海道価値創造パートナーシップ会議を設けさせていただいております。3 月 8 日に札幌で第 1 回を開催させていただいて 4 月 24 日に苫小牧、先週 5 月 15 日に岩見沢、今日の網走が 4 回目でございます。来週 28 日には稚内でも開催いたします。今日は進行の今からも話がありましたが、日頃地域の課題解決や活性化といった問題に積極的に携わっておられる皆様から経験に基づいたご意見をたくさん頂けるのではないかと、個人的にも大変楽しみにしながら、期待をしながらこの会議に参加させていただいております。今日いただいたご意見はいろいろな形で今後の計画づくりに反映したいと思っておりますので、どうか今日は忌憚のないご意見をたくさん聞かせていただけるようお願いを申しまして、簡単ですけれども冒頭の挨拶にさせていただきたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

２．出席者紹介

今：
　報道の皆様のカメラ撮影はここまでとさせていただきます。続きまして本日ご出席の皆様のご紹介をさせていただきます。有田敏彦様でございます。

有田：
よろしくお願いします。

今：
上野真司様でございます。

上野：
よろしくお願いします。

今：
黒瀧秀久様でございます。

黒瀧：
黒瀧です。よろしくお願いします。

今：
後藤菜生子様でございます。

後藤：
よろしくお願いいたします。

今：
新保元康様でございます。

新保：
よろしくお願いします。

今：
三木亨様でございます。

三木：
よろしくお願いします。

今：
道山マミ様でございます。

道山：
よろしくお願いいたします。

今：
　もうお一方、大黒敦子様がご出席の予定でしたけれども、体調を崩されたということで急遽ご欠席でございます。ご了承お願いいたします。次に国土交通省側の出席者を紹介いたし

ます。澤田北海道局長でございます。

澤田局長：
改めてよろしくお願い申し上げます。

今：
横田北海道局企画調整官でございます。

横田：
よろしくお願いします。

今：
同じく橋本企画調整官でございます。

橋本：
橋本です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今：
岡部北海道局長でございます。

岡部：
本日はよろしくお願いいたします。

今：
山岡網走開発建設部長でございます。

山岡：
山岡です。よろしくお願いします。

３．国土交通省北海道局説明　新たな北海道総合開発計画に向けて

今：
　それでは北海道局から新たな北海道総合開発計画の策定に向けてということでご説明いたします。

横田：

資料 2 の新たな北海道総合開発計画の策定に向けてという資料をご覧いただければと思います。1 ページめくっていただきますとこちらが新たな開発計画の策定に向けての主な視点・論点でございます。先ほど局長の挨拶にもありましたけれども、計画検討背景といたしましては、時代の潮流の変化が 3 点ございます。人口問題、グローバル化、大規模災害の切迫でございます。そして我が国における政策課題として地方創生がクローズアップされており、国全体で本格的な人口減少時代に適応した社会経済システムを構築しようとしてございます。2 ページ目に人口のグラフがございます。赤のグラフが北海道、青の線が全国でございます。北海道は平成 9 年をピークに減少しておるということで全国に比べまして 10 年先行しております。右肩上がりの高齢化のグラフをご覧いただきますと、全国を上回るスピードで進展をしてございます。1 ページに戻っていただきますと、こういう時代の潮流を踏まえますと北海道の最大の強みであり、我が国の宝剣である第一次産業、観光、これらの生産空間の維持が困難になるということで新たな計画の期間は、この来るべき 10 年は生産空間のサバイバル、地域としての生き残りをかけた 10 年であるという認識でございます。ビジョンといたしまして 2050 年を見据えた世界水準の価値創造空間の形成を目指すということを次の計画のビジョンということで検討を進めてございます。また 3 つの時代の潮流の課題に対応した施策のフレームワークとして（3）に書いてある項目を考えてございます。色分けしてございますが、青の人口問題に関しましては、地域の維持を目指し機能分担と連携を図る地域構造の保持・形成、また人材の育成や交流・協働人口拡大等による多様な人材の確保・対流の促進、それらを戦略的な対応方針といたしまして、人が輝く地域社会を目指したいということでございます。またグローバル化への対応として世界に目を向けた産業、仕事・雇用を作り出し、また外からお金を稼いでくる産業の振興ということを考えてございます。また災害の問題に関しましては強靭な国土、ひとつは再生可能エネルギーのさらなる活用、またバックアップ機能の強化等を通じた強靭な地域の形成、こういったことで安全・安心な社会基盤の形成の施策で検討中でございます。また施策推進のポイントといたしまして人材の育成・活用、関係者が連携するための産官学のプラットフォームの重層的な展開が重要になると考えてございます。本日の会議のサブテーマは人材の育成活用ということですが、このコンセプトをその裏にございます資料でご説明いたします。価値想像力ということでございます。地域に稼ぎをもたらせたり、社会の課題解決を提案実行したり、人々の生き方・暮らし方を変えていくためには、新たな価値を生み出す力を高めることが重要になります。では新たな価値はどうしたら生まれるかということですけれども、多様な人材が活発な交流、コミュニケーションを経験することで醸成されていくのではないかと考えております。地域の価値を発見したり、磨きをかけたりするためには多様な人材の確保、それをいかにして進めていくのかという問題意識でテーマを設定させていただきました。簡単ですが説明は以上でございます。

４．出席者による意見発表【テーマ『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備、対流促進』（サブテーマ）雇用の維持・創出】

①　ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介

今：

それではご出席の皆様からのご意見をいただきたいと思います。はじめにお一方 3 分程度を目安にご自身の取組や活動の内容などについてお話しいただきたいと思います。その後、お一方 6 分程度を目安に活動や取組を踏まえて課題や解決方法、あるいはそれを踏まえた上での新たな北海道総合開発計画や行政に期待することについてお話しいただければと思います。

有田：

我々の活動は皆さまのお手元に資料がいっていると思いますが、左下の所にある社会連携推進センターというところの活動になります。工業大学ですので農商工連携のモデルを作りたい、その中でも工業的なところにというイメージを持って、それから医工連携ということで地域の医療と連携できればということを考えています。さらにはこの地域は第一次産業が大変強い地域ですのでそれを意識した動きをしようということで資料の右上にあるように平成 20 年に学科を改組しております。下から 2 番目のバイオ環境化学科というところにバイオ食品コースというのを設け、食品関係に強みを持っていこうと、ただし、農学部的なというよりは工学部的な食品コースをイメージして進めようとしています。さらには今求められているのは専門性がやたら深いよりは専門性は多少浅いけれども幅広い人材を育てるということでマネジメント工学コースというものを設けて地域により対応していこうとしています。もともと地域に開かれた大学を目指していた大学なので改組もそのような形になりました。その中で我々の中では第一次産業の工業化を合言葉に学生を地域にどう仕込んでいくかというような活用も進めております。私は金属業界にもおりましたのでそういったところの人材育成ですとか、バイオ食品コースができたことを活用して、工学的農業クリエイター人材育成を目指しています。これの発祥は当時民主党政権だったので、公共事業が全然できなくなりこの地域の建設業の方々が大変困っていたところに業種変換をということでお手伝いできないかということ、建設業には我々の旧土木開発工学科の多くの学生が行っておりますので流出を防ぐということも含めて、そういうようなことを進めていこうということでした。この地域の強みでしたハッカを中心としたハーブなどを中心に進められればということでハーブティとかレッドビートで酢を作るとか、ビートル酢なんて名前を付けて、これは売れなかったですけども、レッドビートでグミを作ってグミのような赤を強調したビーツということで Red　it　Beets ということで、若干おふざけをしながら商品開発をし、それを売るという実習で地域を彩る食物語を開催するなどと進めていました。その中で我々としては、元々気持ちが分散する地域ですのでそれを少し、思いのべ

クトルくらいは同じになればなということで我々が進めている人材育成の活動その他であります。

上野：

私は津別の森の奥の方でホテルの支配人をするために 2010 年に横浜から移住してきました。元々町営であったホテルがやっていけないということでそこの支配人として移住してきたのが北海道生活のスタートになります。今やっていることは主に観光になりますけれども、観光の定義は意外に曖昧なのだなと観光業に携わって思いました。北海道大学の先生から教えてもらったのですが、観光とはという定義をどう捉えるかというと「1 泊以上 1 年未満の宿泊を伴う楽しみを目的とした移動と帰還」と定義を出されていたんですね。これはなかなか面白いなと思ったのですが、観光というからには宿泊を伴わないといけないということが面白いと思ったひとつですね。楽しみが目的でないといけないということで、これは人それぞれで、移動と帰還とあると、ホテルは宿泊の手段として大きな役割をしているのですが、通り道でもないですし、津別の森の中でホテルをしていて目的がないんですね。ここで目的を作らないといけないということで少しホテルから軸足を外して NPO 法人を設立しまして、地域の森や資源でお客さんを楽しませられないかということで始めたのが NPO 法人の森のこだまになります。お客様の楽しみと宿泊という両輪で、目指すところはお客様にいっぱい来ていただいて地域が元気になって行けばいいなというのが今やっている活動になります。

黒瀧：

私の資料は資料 5 に書いてありますが、東京農業大学は平成元年に開設しまして今年で 27 年目、昨年度 25 周年記念をしたところですけれども、なんで東京という名前の大学が網走にあるのかというのは皆さまから毎回聞かれてきましたが、非常に北海道に縁の深い大学です。特に北海道開発局、北海道庁の先駆けをなした北海道開拓使の四等出仕で初代講師の榎本先生が北海道に関わり、幻の蝦夷共和国を作ろうということで蝦夷頭総裁になり旧幕府を中心に北海道開拓に邁進しようというところで挫折しました。その後人材育成のために徳川総家からお金をいただきまして徳川育成会育成校農業科という名前でスタートしたのが本学の前身でございまして、今年で 124 年目です。私どもでは初代講師の榎本先生の考え方にのっとりながら地域の活性化を進めるべく動いているところです。 1 ページに書いてあります通り、榎本先生は近年、近代日本の万能人という評価をされています。語学力は卓越して 5、6 カ国語操れたということもありますし、オランダでは化学系の研究と万国公法と呼ばれる国際法の先駆け、これは国際法学者の日本で 2 番目に国際法を学んだ人物として位置付けられています。開拓使では北海道の調査をケプロンと競合しながらずっと調べて、炭鉱の開発の基礎を作り、北信社という開拓会社を作りまして、小樽の商店街の初期も作り、手宮線の開発まで構想したといいます。ケプロンが室蘭を北海道の拠点にする

というところを榎本先生は小樽を中心に北海道の開発をするべきだと申して、榎本論が黒田により採択され現在の小樽札幌線が形成されているということでございます。また樺太・千島交換条約を結び、最後は農相大臣として官営八幡製鉄所の設立構想まで関わったという万能人です。そして教育面では徳川家の幕臣を育成しながら人材育成、特に北海道開拓の人材育成を育英高で行っていました。そういった担い手を作ることが本学の前提であったということでございます。現在私どもは国際交流、持続的な社会発展、地域資源とものづくり、教育者の視点、文理融合的な万能人の形成という 5 つのフレームワークで生物産業学部の構想を練っているということでございます。人材育成に関しては次のページにありますように、現在は 4 学科あるのですが、一次産業から三次産業、生産、加工、流通、ビジネスという流れの中で地域資源を使った一貫したシステムとして学部を構想しているということでございます。本学部は理系なんですけれども、経営学士と農学士という２つの学士号を 1 学部で出すという特色を持った構成になっております。さらに網走寒冷地農場、オホーツク臨海研究センター、北海道でも１、２を争う施設ですけれども食品加工技術センター、それからいろいろな資源開発の研究所や、地域コンソーシアムを行うオホーツク実学センターや、食品の原料を研究しながら食品メーカーと食農連携をする食品香粧研究会も作っております。また 3 ページにありますように各種の学部横断的なプロジェクトに取り組んでおります。1 つは農学を発展させた生物産業ワーク概論を作り、さらに北海道学やオホーツク学を提唱し、そこでの資源をフードマイスター育成ということで高付加価値化を担う人材育成をする。さらに北海道の大学では初めて内閣府の食の 6 次産業化プロデューサーのレベル 3 までを認定していただく資格取得もしているというところであります。また、農作業・漁業作業の単位化、地域イベントの参加、自然環境教育で知床をはじめとするいろいろなところに学生を派遣していろいろな人材育成に取り組んでいるというところであります。また学びあう視点としては 5 つの視点で学生を育成し、4 ページにございますようにオホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾という社会人講座も北見工大と連携しながら展開し、NPO 法人で修了生を受け皿にしてさらにものづくりの活性化に取り組むようにしております。現在修了生は 101 名出ております。また大学発のベンチャー、東京農大バイオインダストリーも大学の附属で作っておりまして、そういった形で地域活性化に寄与する体系を 27 年間で作り上げてきたということでございます。今年からは榎本先生のような人材を求めたいということで自己推薦型榎本武揚フロンティア入試ということでチャレンジ精神やフロンティア精神旺盛な全国、世界から集めるべく新しい自己推薦型入試を開設し、奨学金付きでいい学生を集めたいという活動をしています。長くなりましたが本学の取り組みをご紹介いたしました。

後藤：

知床らうすリンクルの代表をしております後藤と申します。資料６をご覧いただきながらご説明いたします。私は埼玉県の出身で羅臼に移住して 8 年目になります。前職は環境

省のアクティブレンジャーという仕事をしておりまして、ガイド会社を設立して 3 年目になります。知床羅臼の魚食文化とか自然に触れるツアーをしています。2 枚目は写真を見ていただきたいのですが、主に産業ガイドと自然ガイドの二本立てで行っております。羅臼は自然豊かな町でありますけど、豊かな産業がありますので、そういった今まで目を向けてこなかったものをぜひ観光客の方に見ていただきたいという思いで、市場見学ですとか秋サケの荷揚げ見学といったことも行っております。ちょうど今はウニのシーズンなんですけれどもウニ割り体験をお客様にしていただいたうえで実際に召し上がっていただくといったこともしております。自然ガイドとしましては羅臼湖トレッキングですとか、ホェールウォッチのシーズンですのでホェールクルーズですとか原生林ウォークということもやっております。次のページですけども地域文化・歴史に触れるエコツアーということで、羅臼には最高品質の羅臼昆布があるんですけれども、それを知床岬の先端で羅臼昆布を作ってきたという歴史がありまして、昔はそこに 56 件の番屋が並んでいたんですけれども、今はたった 2 件しかない実情なんですね。それに知床岬の先端に皆さんで上陸をして羅臼昆布が作られてきた歴史や文化を実際に見ていただくツアーで、これも上陸が禁止されている場所なんですが、このエコツアーに関しては教育が目的ということで特別にエコツーリズム検討会議というところに通って、3 年間限定で実施が認められた特別なツアーです。こういった地域文化や知床というところが自然だけが価値というのではなくて地域に人が住んできた歴史も知床の新たな価値だということもお伝えするようなツアーも行っております。次のページですけれども、地域活性化を目指してということで、かつて私以外に若い人たちが羅臼の素晴らしさを一人でも多くの人に伝えたいという思いを抱いた若者たちが羅臼を元気にしようとワーキンググループを結成しまして、去年から知床羅臼昆布フェスタというお祭りも開催しております。昆布漁に実際に触れたりですとか、食を通して、見て、触れて、食べて羅臼昆布を知るイベントとして行っております。これも今年で 2 回目になります。主にこのようなことを実施しております。

新保：

私は小学校の教員でございます。34 年間、札幌市内で教えてきております。小学校の教師というのは 1 人で全部の教科、体育から音楽まで全部教えますが、中でも社会科が私の専門になっております。教材開発をして新しい学習を作るということをしてきましたが、その中でひとつ大きなのは、雪に関する学習です。北海道の子供たちは半年は雪の中で生活しますが、雪にまつわる学習が全くなかったんですね。例えば札幌市ですと除雪について毎年補正も合わせると 200 億円ほどのお金をつぎ込んでいます。いくら予算を投じても除雪の仕組みはよく理解されていません。例えば除雪と排雪の意味を知らない大人になっていくのですね。これでは本物の市民が育たないのではないかということで雪の学習を作りました。「北海道雪たんけん館」というホームページを作り、学習のサポートをしています。このホームページでは、英語の学習もサポートしています。今英語の学習が非常に大事だと言われ

ておりますけれども、外国人と会ったときに自分の住んでいる町のことを説明するときに、雪のことを説明できなければ北海道の子供は困るはずなんですね。ところが全国一律の英語の授業ですと雪に関する英語の学習はごくわずかです。それを私たちがホームページで提供するというようなことをやってきております。

また、雪の学習をいろいろ作っていく過程で、道の学習の大切さに気がつきました。道路はインフラの王様と呼ばれるほど大切なもので、家を一歩出れば道路を使わない日はないわけですが、その価値や役割についてもよく知られていません。そこで、道に関する学習づくりもしてきました。

今校長 8 年目となります。学校の情報化にも力を入れて、取り組んでいるところでございます。

三木：

私は摩周湖の近くでピュアフィールド風曜日という小さなホテルをやっております。ユニバーサルデザインでお年寄りだろうと体の不自由な方だろうと安心して泊っていただきたいというコンセプトで 17 年間やっております。17 年前を考えるとユニバーサルデザインというような言葉は全くなかったです。バリアフリーという言葉がだんだん出てきたかなというくらいであります。学校を卒業して東京でサラリーマン生活を送っておりまして、なにかやるなら 50 歳が契機かなと思い、何をやろうかなといろいろ考えていました。たまたま北海道の福祉のまちづくり条例ができて、それに応募しまして、こういった観光に福祉の視点を取り入れたものが今後の北海道の大きな柱になるだろうということが評価されたのだと思います。ものすごいお金を貸してもらいました。そのときは有頂天になっていたのですが、返すのを忘れていまして今でもヒイヒイ言っております。私は福祉と関係のないサラリーマンでして、妻が私のビジネスパートナーです。妻が福祉の学校の先生なんですね。大学の教員というような知識を持っておりまして彼女と私の両輪の事業だと思っております。作ってすぐに感じたのは、いくらホテルがユニバーサルデザインで泊りやすいなと思っても、観光地がないと話にならないわけです。車椅子の人が来てもどこにも行くところがない。それがすぐわかりまして、しかし私の力では何もできないということで、いろいろな仲間を集めてユニバーサル部会を作りました。2008 年に作りました。おかげさまで数は多くはないのですが、皆さんの協力がありまして車椅子でもカヌーに乗ったり乗馬経験ができたりアクティビティを開発してそれを販売することができています。資料の裏にあるのは例ですけれども、今では宿屋が一番狙っているのは連泊とかリピーターですけれども、うちは非常に連泊の人が多いですし、リピーターの方が本当に多くなりました。目的を持って来てくれるようになりました。17 年間の蓄積でやっとなんとなく見えてきたのかなと思いまして、体の不自由な方が北海道に来た時に大自然から受ける影響力というのはものすごいものがあります。どう説明していいかわからないんですけれども、想像以上の旅の喜びを受けますのでこれを弟子屈町の財産、北海道の財産と思って、私のみならず、カヌーの業者や

乗馬のインストラクターが共有してくれています。今では麻薬を打たれたいねという表現まで出ています。麻薬というのはお客様の喜ぶ顔ですよ。またこれから忙しくなりますのでいっぱい麻薬を打たれて、もっともっと住みやすい、来やすい町にできたらなと思っております。

道山：

出身は千葉県の九十九里周辺で生まれまして、黒瀧先生からご紹介がありました、東京農業大学の 1 期生として 4 年間過ごしたのが北海道との最初のご縁でありました。卒業後は都内の百貨店で地域食材を扱う食品を扱う仕事をさせていただいておりました。その後ネパールに青年海外協力隊で 2 年間、食品の開発で過ごさせていただいた後、出産後 10 年近く北海道とはご縁がありませんでしたが、8 年前に大学の講師から網走で農村振興やそういったことのベンチャー企業を立ち上げるにあたって機会をいただき北海道に戻らせていただきました。3 年ほどベンチャーをお手伝いさせていただいた後に 2011 年に合同会社大地のリンゴを立ち上げました。この名前から「リンゴの生産販売をしている会社ですか」とよく聞かれるんですけれども、会社を立ち上げた元々の思いは、大地のリンゴというのは北海道の特産であるジャガイモのことなんですけれども、ジャガイモのフランス名がポム・ド・テールというそうで直訳が大地のリンゴということで、その名前からもフランスの方はジャガイモを日本人とはずいぶん違った価値観で見られているんだなということが印象的でした。自分たちの足元にある、なんだか霞んでしまったようなものをもう一度見直して新たな商品開発とか情報を北海道から発信したいと思ってこの社名を付けました。もともとは企画コンサル会社で立ち上げたつもりだったのですが、現在は農家さんや第一次産業の方からいろいろな食材の開発のご相談もありまして、小さい工場も作りまして、製造も行っております。製造・開発・販売の企画会社でやっております。網走だけでなくオホーツクの生産者、酪農、生産、畑作、土作り、原料作りからをしている方たちが作られているものをどうやって発信していくのか、売るだけじゃなくて地域をどう発信していくのか考えるオホーツクテロワールという団体に関わらせていただきまして、昨年 10 月に株式会社オホーツクテロワールという会社を立ち上げまして、現在は生産者さんが作る商品の販売のお手伝いをさせていただいております。

② 日頃の活動を踏まえてご意見

今：

ありがとうございました。皆さまの活動を踏まえたうえで日頃感じておられます課題や、解決の方策、あるいはそれらを踏まえまして新たな北海道総合開発計画や行政に期待することをおひとり 6 分を目途にご意見をいただければと思います。

道山：

どういった活動をしているかということですが、網走には水産の加工業者さんは、大手の加工業者さんがたくさんありまして、活発に商品を製造されて海外にも輸出されているという地域なんですけれども、農産物に関しましては畑作の産品が中心ですので、良く言われる 6 次産業化のようなモデル的なケースで新たな商品を開発しまして販売していくといっても、そういったものを委託して一緒に開発して商品を作っていくということがそんなに整っていない地と言っていいと思います。そこで生産者さんたちが自ら製造所を構えるという形もありますし、製造ができる企業さんと連携するという形で新たな商品を作っていくという形で地場産品を波及するという動きの中で、私が活動させていただいている部分は、当たり前のように聞こえますが、農業生産者さんが持ってらっしゃる情報と、物流の方たちが持っている情報がずれています。農産物で言いますと、1 年中あると思われている物流の方が多くて、農産物は 1 年中あるわけではありませんで、旬がありますし、保管されている期間も決まっています。そういった当たり前の情報が首都圏、特に消費者がたくさんいるところには届いていない状況が見受けられます。そういった情報のやり取りをどうやっていくかということ、インターネット等の情報発信もありますが、もっとアナログな形で、出版物で情報を発信したり、具体的に商品を持って試食販売したりする、そういったことの支援をさせていただいております。6 次産業化のプランナーという役割もさせていただいております。認定やプランニングのお手伝いをさせていただいて、国の支援を受けて整理をするということから、製造されてものを売っていかないといけないので販売の支援をさせていただいております。観光と結びついている部分で言いますと、網走に道立のオホーツク公園というとても景観のいいところがあるんですけれども、その景観を見ていただきながら、まるごと市というマルシェ形式のイベントをやらせていただいております。そこでは農家さんや作り手さんに出ていただいているんですけれども、ちょっと異色なのが、食だけでなくクラフト、いろいろな木工作家さんですとか織物さんですとか、そういった食の人ではない人たちを情報交換の場として結びつけるというイベントをさせていただいておりまして、昨年は 50 件弱の方に参加していただいております。そこで例えば養蜂家さんの圃場を見学していただいて蜂蜜を取るところを見ていただいたり、体験していただいたりというマルシェを企画したりということもさせていただいております。課題の部分は先ほどもお話がありましたけれども、私が今感じているのは人材の確保の部分ですけれども、最初なので見当違いな話だと申し訳ないですが、こういった地方で大変優秀でイメージに合った方を探すということは本当に困難なことだと思います。特に私たちのような小さい企業ですと男性の方を大卒で雇用するというのはなかなか難しいので、うちの社員もパートさんも全部で今 7 名いるんですけど、全員が女性なんですね。女性の活用ということでご提案というか、自分が思っていることですが、自分もそうだったんですが、大学までいかせてもらって就職して、その後、子育てに入ってしまうとなかなか社会と縁がなくなってしまって、地域

の取り組みですとかちょっとした事にも関わりを持ちたいんですけれども、そういったきっかけがなかなかできないということがありました。人材というのは実際そこに結構いるんじゃないかなと思ってまして、お子さんの子育てがひと段落したり、しなくても、一定の時間を私たちの取り組みや企業の一部に力を貸してもらえるようなご案内がきちんとできれば、そういった女性の人材をうまく活用できるのではないかなと思っております。子供が急に熱を出したり、なかなか難しいところもあると思うんですけれども、これからどんどん人口が減少していく中で女性をうまく活用していただく、勉強していってもらう、力を付けていってもらうという機会を作っていただければまだまだそういった人材は眠っているのかなと思います。

三木：

私の住んでいる弟子屈町というのは第 1 級の観光スポット摩周湖があったり、屈斜路湖があったりします。これは昔の観光のスタイルですとこれで食っていけたんでしょうけど、今は食っていけなくなっています。私が来た 17 年くらい前は弟子屈町の人口が 11,000 人くらいいたんですが、今は 7,200 人なんですね。どんどん少なくなっている。数は数えていないんですけれども、町のお店が半分になっているんですね。片づけられればいいけれどもそれもできないという状況になっています。もっと象徴的なのが、去年一昨年にかけてですけれども、道東を代表する川湯温泉があるんですけれども、そこの大きなホテルが倒産しました。また売却されました。それが今稼働していないという状況です。本当に観光地なのだろうかというところが多々ありまして、先ほど人材の話がありましたけれども、どんどん人材も流出しているという状況でございます。何ができるのかなと考えたときに、先ほど言ったようにホテルの繁栄は地域の繁栄がないと駄目だとわかっていたので、そういう観光地にするために体の不自由の方やお年寄りや杖をついている人を接待するにはどうすればいいのか考えました。もう一回、観光資源はどういったものがあって、弟子屈の中にはどういったものが観光地で見せられるものがないかと調査しました。そうしたらあったんですね。それは例えば視覚障がいの方が一昨年くらいから弟子屈に来られるようになりました。硫黄山はもうもうと煙が出ているんですね。そして硫黄の匂いがしているんですね。視覚障がい者の方は 4 感で感じられるんですね。ですから地底から鳴る音や硫黄の匂いや、吹き上げるものに打たれるとかですね、そういった接し方ができるだろうということで、これは見せ方だろうと思って、それを試行してみたんですね。3 年目になりますけれども、今年も 3 組の方が予約いただきました。それはリピーターさんです。去年来てくれた方が今年も来てくれます。何が言いたいのかというと、観光地をもう一回見直せば、磨けば光るダイヤモンドになるというように思っています。こちらの表を見ていただければわかると思うんですけれども、左の下にカヌーの絵があると思います。これは車椅子の方でもできるようになりました。その上に乗馬ですけれども、乗馬セラピーの資格を持っている人がおりまして、その人がいろいろな形で関わりを持って教えてもらうということです。その上の池の湯という

湯溜まりなんですね。大自然の足湯なんですね。そこに車椅子の人を連れていくんですね。これもすごく喜ばれる。対象に応じた見せ方で大分違ってくるなと思います。そうこうしているうちに観光庁が動いてくれまして、12 時の方向に絵がありますけれども、これは川湯温泉にあります温泉川なんですね。そこに川の傍まで車椅子でいけるようにスロープを作ってくれました。車椅子の前の車輪受けを上げれば車椅子に乗りながら足湯になるんですね。天然の足湯ですね。車椅子に乗っておられる方は旅をあきらめているという方がいっぱいおられたんですけれども、こういった形でやり方を考えればまだまだ捨てたもんじゃないなと、お客さんの方もものすごく感心してまた来たいという話をしていただいております。ただ単に行ってらっしゃいというのではなくて、旅のサポーター、トラベルサポーターと呼んでいますけれども、それを今養成中です。他に仕事を持っておられる方でも、私が案内してあげるからという、その案内の仕方もそこらにあるような観光の案内はしません。今日は町でこんなことがあったとか、私生活の会話をしてやってくださいよということでお願いしています。非常にそれも好評でございます。去年視覚障がい者の方が来られたんですが、今までいろいろ旅をしてきたが、こんな旅はしたことがないと言われました。それには別にバリアフリーにしたりハード面を入れたりするとお金がかかります。これは 1 銭もお金がかかっていません。知恵と気持ちでできたものだと思っています。こういったことをしていけばまだまだ捨てたもんじゃないなと思っています。それと人口減少の話になりますけれども、移住したいという方が希望としてあるんですね。町も動いてくれまして、空き家住宅を借り上げして斡旋しようとする動きですとか、うちのホテルにも車椅子の方で横浜の方で住みたいということでホテル住まいされている方も出てきました。毎日北海道ライフを楽しんでおられます。そういったことは現象として面白い話だなと思っています。課題はたくさんあります。大手ホテルのオーナーさんと、高齢化社会だから、また外国人のための大きな部屋が必要だということでバリアフリーな部屋を作ったらどうかと提案したらですね、皆さん口をそろえて「それはした方がいい、絶対にいいことだ」と言うんですね。ところが一歩前に行かないですね。相当お金がかかるかなとも思いますし、そういった方の相手をするトレーニングもしていないし経験も無いということがネックになっているのかなとも思います。そういったことも改良するために、誰が来ても楽しい町にしたいなということで、妻が実際にやってくれているんですけれども、そういうサポーターを要請するような活動もしております。資格を出すとかではなく、実際に経験してくださいということで、うちにたまたまそういったお客さんが来ますので、そういう方との橋渡しをしてどんどん町の方に出て観光地を巡って自分で経験してくださいということでやらせてもらっています。

もうひとつは弟子屈町は交通アクセスが非常に悪いんですね。車椅子の方が来られるときに、飛行機は完璧にバリアフリーなんですね。ところが空港を一歩出たとたん、レンタカーもリフト付きのレンタカーは本当に少ないです。それをやるためにどうするかといったら町の介護タクシーを使うんですね。うちから女満別空港まで 70 キロくらいあるんですね。2、3 万円かかるわけですね。それだけのお金を使ってここまで来てくれるというのが悩み

の種なんですね。うちからどうやって観光地に行くんですか。箱根の観光地なんかは歩けば観光地に行けるんですけれどもここはそうはいかない。20 キロくらい離れているんです。バスもありません、電車もありませんという状態でありまして、もっと交流をしたいとは思っているんですけれども、最後には交通アクセスがネックになってしまうということが今抱えている課題です。

新保：

資料 7 にあるのですが、日本マクドナルドを作った藤田田さんの言葉に「人間は 12 歳くらいまでに覚えた味がおふくろの味になる」というものがあります。つまり「子供の時の教育が大事だ」と置き換えて、この言葉をよく思い出します。つまり、「12 歳までに北海道がどういうふうに学ばれているのか」が大事なところとなります。新しい北海道総合開発計画案には、人こそが資源だとありますが、北海道のことをちゃんと教えていけているのかということが大事なポイントかなと思います。北海道の味、魅力をちゃんと子供たちに教えられているか。黙っていると「冬は大変だ」、「雪はない方がいい」という家庭での会話だけが教えられて、魅力という面では伝えられない可能性があります。北海道の魅力、北海道を愛する気持ち、故郷に貢献したいという心、北海道の知識も学ばれているのかというところが問題かなと思います。子供たちは自分たちのごく身近な地域のことは意識しています。また、教育基本法が変わりまして日本人としての教育も充実してきました。今道徳の教育も新たに教科にして、日本人としてのアイデンティティも育てようとしています。さらに大きく地球人という言葉もよく耳にします。こうした中で、北海道民という意識がスポンと抜けているような感じになっているのではないかなと思います。新たな北海道総合開発計画があったとしても北海道民としての意識が抜けていてはなかなか難しいことになるのかなと思います。

北海道がどう学習されているか、お話します。昔、私が小学 3、4 年生のころは「私たちの北海道」という副読本がありました。その中に北海道総合開発計画が 10 ページくらいにわたって掲載されておりました。そういう学習があったんですね。北海道の課題、魅力、どうやってこれから開発していくのかを小学校の時から勉強していたんですね。そういうことが今はすっぽりないのです。

社会科の学習時間が昭和 46 年の学習指導要領では 1 年生から 6 年生の間で 663 時間あったのですが、今は 3 年生から 6 年生までで 365 時間しかありません。この減った分が 1、2 年生の生活科、3 年生以上の総合的な学習に分かれたんですけれども、これがなかなかうまく回っていない状況も現実としてはあるのかなと思っています。総合的な学習は地域の課題に応えるような学習をしていいということになっていますが、なかなか自分でカリキュラムを作るというのは大変な作業で、十分に北海道について学べていない現状があるのです。

もうひとつ大きな問題として、「公」についての学習が不十分と書いておりますが、今の

時代は、「個」の大切さが強調される一方で、「公」の学習が弱いのかなと思います。国土の脆弱性も「公」のことだと思いますが、よく知られていない。公共事業の点から言いますと、その課題についてはよく話題になるんですけれども、公共事業の成果についてはあまり話題になっていません。私の子供のころは舗装されている道路がほとんどありませんでした。私は昭和 33 年生まれですけれども、家の前の道路はもちろんバスの走っている道路も砂利道です。石を投げて喧嘩をしていた記憶があります。それがたった一人の人間の一生の間に全て舗装されている。このすごい努力についてなんの学習もない。道路が舗装されているのは、当たり前だということになっているんですね。防災についても防潮堤が役に立たなかったんじゃないかとかいろいろな議論もありましたけれども、実際にはいろいろ役に立っていると聞いています。ところが、そういう部分が教育として扱われていないのでみんな知らないんですね。これではどんなにいい北海道総合開発計画を作ってもなかなか浸透するのは難しいのかなと思います。

「隠れたカリキュラム」という問題もあります。教師を対象にアンケートで調べてみたのですが、公共事業に対してあまりいいイメージをもっていない人が 63%だったんですね。公共事業を学んだことがないという先生も 64%いました。表のカリキュラムとして公共事業の問題点ばかりを教えるということはないのですが、教師の空気が隠れたカリキュラムとして、なんとなく子供に伝わると言われています。そういうところも大事なポイントかなと思っています。

4 番目に町づくりに貢献した人の学習が不足していると思っています。昔は伝記とかでたくさん勉強したんですけれども、それもちょっと不足かなと思っています。

今回、北海道総合開発計画が昔は石炭とか資源のための法律だったんだなということを初めて知りました。人こそが資源であると位置づけようとしていることは素晴らしいなと思います。黒瀧先生のところでも北海道学という言葉がありましたが、北海道のことをしっかり学ぶという仕組みを作れないものかなと思います。それから優良な北海道学を教えた先生や実践に対する表彰や、そういったことで光を当てるという方法もあるだろうと思います。国土交通省、北海道開発局、北海道教育委員会、いろいろなところが組んで民間のお知恵も借りながら新しい北海道の学習を作るのも面白いかなと思います。また隠れたカリキュラムが我々教師の中にありますので、現場の先生に対する研修の機会も重要だと思います。私が若いころは開発局は研修の場を提供してくれていました。バス 2 台を札幌の全日空ホテルの前から出発させまして定山渓の奥の水源地帯、そこでは水源を涵養するための森林の手入れをしているんですけれども、そこからスタートしてずっと川を下って最後は石狩川の放水路まで行く。河川管理の大切さについて研修したのです。貴重な機会だったなと思います。今はそういう研修がないのでちょっと残念だなと思います。こういった一連のことをホームページ等のメディアを通じて広めていくことも重要だと思います。

後藤：

資料 6 の 6 ページからをご覧いただきながらお話したいと思います。私は産業ガイドをやっておりますので、その視点からお話しさせていただきますと、目指したい産業ツアーが関わる地域づくりということで、地域資源の自然環境、地域文化、歴史、人材が観光客と地域外でどういう結びつきになるのかを示したものがそちらになります。観光客の方が地域資源を利用した時に価値認識を学び、深い感銘、心の財産を得られ、環境保全、地域理解、産業振興、人材育成などが地域資源に返るというような仕組みがあるといいなと思っていますし、そこにガイドが介入することで地域理解や人材育成が目指せるのかなと思います。そのためには地域の主体性があること、自律的であること、持続的であること等が考えられますし、市場競り見学や羅臼昆布加工体験は私がやり始めたころは漁業者さんの理解を得ることももものすごく大変でしたし、観光協会、町役場、漁協など幅広い理解や協力を得ることが必要でした。そういった関係機関の協力を得ながら、より地域に密着したツアーづくりをしていきたいと思っております。新たな地域価値創造・人づくりに必要なことということで考えてみました。ひとつは地域資源の掘り起こしが必要だと思います。例えば市場の競りなどは羅臼町の方々にとっては当たり前のことでありましたし、毎日魚が揚がり、そこに競りがあり、それが流通していく仕組みに観光が関わるということは全く考えていなかったそうです。むしろそこに観光客が入りこむということは邪魔だと町の人たちは思っていましたし、そこにどんな価値があるのかということがなかなか見いだせなかった。そこを、私を含め観光協会の方々の努力や尽力があって地域の資源をより広く伝えていく仕組みとして競り見学、そこにかかわる人を見ていただくことが食文化の普及ですとか、地域資源の開発になるんじゃないかと考えてやっております。ここにも例として書いてありますが、羅臼町では鮭が秋になるとたくさん揚がります。今までは焼鮭やイクラ等の飲食や土産物での提供しかなかったのですが、これからは荷揚げ見学だけではなく、加工体験や、飲食ももちろんですけど、今までのような鮭定食だけではなく、例えばいろいろな方がいらっしゃるので、都市部の女性をターゲットにしたメニューの開発ですとか、ただ鮭を食べていただくということだけではなく、鮭には抗酸化作用のアスタキサンチンが含まれ、美肌、美髪に効果があると広く言われておりますので、そういったところを目指したようなメニュー開発をしてみたりですとか、上記ターゲットを意識したツアーの開発を目指していければいいなと思いますし、広い視野で掘り起こしの可能性を探る必要があるのかなと思います。またそういった資源発掘には何が必要かというとやはりターゲットを設定することで、顧客は誰なのか。そこにコンテンツが設計されていて顧客が何を求めているのか。そこに発想の転換があって、仮説立て検証立てがあり新商品の産出をするというような仕組みが必要ですし、そこまで粘る努力も必要になるのかなと思います。それには地域連携の強化が必要です。実際にやりたいという気持ちだけではなく、行政やいろいろな方との連携が必要になってきます。目指したい地域づくりと行政への期待ですが、観光は一回性のビジネスモデルの単独では地域の持続的な成長を実現することは難しいですけれども、旅行と観光に産業振興や

物販食や、そこを見て移住したいという方々がいらっしゃったりとか、地域の人との継続的なコミュニケーションとかいろいろなものが含まれると、より事業機会にも恵まれると思います。そのためには地域雇用創出のための新たな方策とか、インバウンド受け入れにかかわる整備とか、起業、移住意欲のある若年層への支援などそういったこともしていただけるとすごくありがたいなと思っております。また、メディア発信やメディア有効利用ということで新聞やテレビなどのマスメディアもありますが、フェイスブックやツイッター等のソーシャルメディアは個人に近いメディアになります。テレビや新聞での大きな報道ももちろんですけれども、自分個人にかかわる小さなソーシャルメディアも有効に活用するような工夫も必要かなと思っております。

黒瀧：

今、後藤様からかなりお話しいただきましたけれども、基本的には私も地域の活性化に必要なことはそうした流れだと思います。私どもでもオホーツクものづくり創成塾では 6 次産業化農商工連携の人材育成に力を入れて今年で 7 年くらいやっておるわけですけれども、一番大事なところは、他者の視点の気づきが大事でして、たぶん後藤さんも羅臼町に移られて、都市の視点で今何を地域に求めているのかというターゲット目標をですね、どこに焦点を当てながらいくのかをよくご理解されたと思うんですね。こういう発想は地域に住んでいる方からはなかなか出てきづらいという部分があるということです。例えば網走の流氷観光は今は中国や台湾からたくさん来ますけれども、昭和 30 年代の話を聞きますと、流氷というのは漁の邪魔で寒くて害物以外の何物でもないという評価なんですね。どうして流氷観光が始まったかというと、ご存じかどうかわかりませんが、海鳴りが消えるんですね。シーンとするんですよ。そこに流氷がびっしり詰まってさらに雪が降ると平原のようになり、夜になると鳴き声が聞こえる。膨張してキュキュキュと音が聞こえる。こういうものに都市から来た人は反応したんですね。そこにターゲット目標を据えて地域の人たちと違う価値観で再評価したところから流氷観光という新価値創造ができたということが大事なことだと思います。我々も丁寧に受講生にやるんですけれども、地域資源が何があるのかということをまず洗いざらい点検する。この作業が地域活性化を考える上では一番大事なんですね。その中で地域の人たちは無価値だと思っていても都市や外国の人たちに何が受け入れられるかターゲット目標を確認して、それに付加価値創造でストーリーを与えていく。これが活性化の原点につながるということがすごく大事だと思うんですよ。私もここに 27 年住んでいますけれども、地域の人は非常に保守的で、後藤さんのお話でも、市場の競りを見たいと言ってもふざけるなとなる。神聖な職場にどこの馬の骨かわからないやつが来て写真を撮って仕事の邪魔だ、ということです。グリーンツーリズムを網走で提唱した時も農家さんからは散々でした。なんで我々が見せ物にならないといけないんだ、そんなことを農大で言っていいのかというのが農家の基本的な反応でした。そこは合意形成を粘り強くして新価値創造に結び付くような仕組みづくりになるような枠組み設定の場を作っていくのが

すごく大事です。それを東京農大でも何年もやってきているということです。ちなみにうちの学生は現在 1,700 人いるんですけれども、9 割が本州です。そのうちの半分は関東圏なんですね。首都圏の学生がほとんどです。そうすると都市の視点で網走地域の評価を学生がする。そこから価値創造が生まれるのではないかと思っています。また、教育力という視点では、付属高校がいろいろあるんですけれども、世田谷に一校、高崎に二校、三校が東松山にあるんですけれども、「いい学生を世田谷ではなくてオホーツクに送ってください」と言うんですね。そうすると「先生必ずいます」と言われるんです。「偏差値はそんなに高くないですよ。でもお宅のキャンパスに送ると人間が変わります。非常に主体的になる。高校時代下ばかり向いていた女子生徒が先生って向かってくるんですよ」と言われます。普通に変わらない教育をしているんですけれども、これは地域力なんですね。地域で漁業系のアルバイトとか農業系のアルバイトがあって、都市ではないことですね。特にホタテの違いの選別は夜中からずっと行って、すさまじくハードな労働なんですけど日給 12,000 円という金額に騙されてみんな行くんです。それをやるとあまりにもきつくて絶望的心境になると言いますね。ところがまとめて 30 万位稼げるんですよ。そうするとバイトで稼ぐ集中的なお金で部活をやるとか旅行に行くとか買い物をするとか。これを 4 年間すると就職突破力がすごいんですね。ある上場企業の漁業関係の就職担当者が今年来まして、「今年はお宅から 7 名採用させていただく」というので「世田谷と厚木とオホーツク、何名ずつくらいですか」と聞くと「世田谷と厚木は取りませんよ。人間力はオホーツクが一番です」ということを言われてびっくりしました。そういった人間力を集めるような人材育成を今後も続けていて、北見工大さんは 60 数カ国から留学生が来ていて、うちはまだ少ないんですが、国際化を進めていってグローバルスタンダードの中でも共有化できればいいのではないかなと思っております。もうひとつは社会人の人材育成講座を始めたということですけれども、誰が一番喜んだかというと、網走市長です。今まで 20 数年間、9 割が道外から来て 85%本州に就職しちゃうんですね。15%くらいしかうちの卒業生は北海道に残らないんです。ところがこの創成塾は地域の人が来るんです。ということは即戦力です。ここに来て農大で学んで 100 数名定着してくれればこんなにいい事業をやってくれて、これは文科省の補助金でできたんですね。これは北見工大さんのノウハウで私たちも講座を開いて、ここにいる上野さんもうちの修了生です。創成塾の修了生で活躍されている方は非常に多いです。こういったソフト事業で人材育成事業に関わるようなところにもう少し力点を置いた補助事業やメニューをもっと支援していただければ、これは農水省や文科省にも要請していることですけれども、国土交通省さんでもやっていただければすごくありがたい。農水では 6 次産業化のビジネスモデルを最低 1 億円と言っているんです。そんなことは最初からできません。おばちゃんたちの数百万から始めて、徐々にそれを大きくするというところからすれば、成長するようなプランニングとサポート体制、資金面やハード面も含めてですね。こういったサポートシステムを作っていただくと地域活性化で道山さんも苦労しないで、まだまだ伸びていって地域で雇用力を持ったスモールビジネスが成長していくのではないかと思っております。

とにかくなかなかそこが続かない。うちはNPOに受け皿を入れてできるだけ大学では修了後もサポートをしていこうと、補助メニューも情報を得て提供をしていこうとやっておりますけれども、みんな悩ましいところです。それから6次化に関しては、男性よりも圧倒的に女性なんですね。男は保守的でホクレンに出荷して、それでやっていけばいいんだという考え方の人が圧倒的で、ところが女性は自分が作ったものは自分で加工して自分で売りたいんですよとなる。そういう話をすると家庭内でバッシングを受ける。農協の中でもバッシングを受ける。どうやったらいいかというノウハウはない。ない時に意を決してこの講座にきました、農大さんでこういう場ができて本当にうれしいですと感動していただいた。我々も初期は知らなくて、男性が結構来るんじゃないかと思っていたのですが、女性の起業家の受け皿を大学自身が地域発信力としてやっていけるのはすごくいいことだなと思ってやっています。ただ、北見工大もうちも文科省の補助金が切れていますので網走市にお願いをして、農大と私立大学ですのでもっと厳しいんですけれども、こういった形で人材育成講座をまだまだ継続していきたいと思っております。もうひとつは 6 次化で作ったものは地産地消だけではだめなんですね。地産他消で首都圏や札樽圏や海外にも売って行くというということからすれば、ネットワーク構築が大事だと思っております。そういった点では本学は世田谷に本部がありまして、そのブランチであるということからしまして、東京とのネットワーク化ができているんですけれども、世田谷でも厳しいんですね。山手線の沿線上に拠点を作りたいということで私どもはいろいろな企業と協定を結びまして、今日も富士通さんに来ていただいて本社とも協定を結びまして、6次化や地域活性化に連携してやっていきましょうということでやっています。先週銀座にサテライトキャンパスを開きました。アルビオンという化粧品会社と包括的連携をしまして、北海道学、オホーツク学への誘いという講座を全部で14回くらいやって、とにかく首都圏の人たちにオホーツクのことをよく知ってもらおうと、そういうインセンティブを与えていくようなことを東京から発信していこうということで、物品もここで作ったものを持って行って、とにかく支援者になることを考えてもらいたいということで銀座のサテライト、23日が2回目ですけれども、文科省の課長も呼んでですね、オープニングをして進めているところです。第2弾は丸の内です。三菱地所は世界の金融支援の中で差別化戦略をどうするか悩んでいて、香港やシンガポールとどう差別化していくか、アジアの金融シティにしていくのか。そこで食、健康をモデルにして金融シティに色付けをしていきたい。そのためには東京農大が一番だということで、供給する食材やアイデアはオホーツクしかありませんよという話をして、世田谷と協定を結ぶ予定ですが、丸の内と三菱地所と連携をして、丸の内にも拠点を作り、発信力を持たせたい。人材育成に関しては、有田先生も我々も苦労して受講生を集めたりノウハウを一生懸命やりながら、人材育成教育は大学の教育と全然違いますからね、そうやっています。日本農業経営大学校とか人材派遣会社のパソナの応援隊、マイファームというベンチャービジネスで 4 億位売り上げてる企業と連携をしまして、農大のノウハウを与えるから相互にいろいろなキャンパスその他を利用しながら全国展開をしようとしています。それでここで培っ

てきたノウハウを全国に展開する。来週茨城県の行方市でシンポジウムをやるんですけれども、世田谷だけでは対応できないということでうちは茨城県の行方市と阿見町とも協定を結びました。ここ本当はやばいんですけどもね。なぜやばいのかというと阿見町というのは茨城大学の農学部があるところですよ。行方市は隣が筑波大学でして両方の首長に「農大のオホーツクとやって大丈夫ですか」と聞くと、「農大さんの方が実学性がありますよ」ということで協定を結んで茨城でも公開シンポジウムをしました。ここで培ったものをここの地域の基盤をしながら全国で展開していく、さらに北の拠点と南の拠点ということで佐賀大学の人材育成講座とも包括的連携をし、あと韓国も入れている。次に中国も入れて、先ほどユニバーサルデザインという話がありましたけれども、6 次化のユニバーサルデザインをオホーツクから発信していく仕組みづくり、韓国に中国大学というナンバー2、3 くらいの農学系の大学がありまして、そこで「先生のおかげでうち補助金取りました。佐賀大で講演した 6 次化の先生の講演を聞いて文科省に提出しましたら年間 2 億円で 9 年間の補助事業を取りました。先生のおかげです」と言われて感謝されました。今度 9 月か 10 月くらいに東アジアの 6 次化のシンポジウムも本学を中心にやりたいと考えております。こういったところで地域から出発しますけど、全国ネットやグローバル化も考えて、さらに価値を新たな視点で、国際化に対する認識とか、都市の人から見ての価値創造とか、そういったことも踏まえてやるシステム、そういった場を作ることも国土交通省さんに協力をしていただきたいということが私どものお願いでございます。あまり長すぎるとまずいのでやめますけれども、第 5 期の総合計画を作った時の札幌シンポジウムで私がパネリストで招かれてその時にお話ししたことがあるんですけど、これからの 21 世紀を考えれば持続可能な社会で知床もありますし、国立公園、国定公園もありますので開発局という名前でずっと行くべきなのでしょうかという問題提起をさせてもらったんですね。どういうことかと言うと、開発はとても大事です。公共事業も悪だと思っていません。地域の事業創造では非常に大事でして、開発重点主義から環境保全とか環境修復とか生物多様性も含めたような公共事業に力点を置いた中身に変えて、北海道開発保全局というような名前でどうかと提案したのですが、受けが悪かったですね。こういう場がありますので当時数年前ですけれども、もう一度申し上げて、森林認証制度というものがありまして、全国 1 の、78 万ヘクタールの森林認証を取っているんですよ。環境に優しい木を涵養にし、できれば東京オリンピックの開会式の舞台にも使ってほしいということを東京都にも陳情して、環境に優しい木材を作るオホーツク、ここも認知してほしいということも先だって申し上げてきたところでございまして、今日は雑駁なお話になりましたが、こういったことを考えているということを申し上げさせていただきました。

上野：

黒瀧先生からも言われたんですけど、これからの地域づくりにはよそ者、若者、バカ者とよく言われるのを聞くと思うんですが、私はよそ者であり、当時は若者だったんですね。バ

カ者は匹敵するなと思って非常に心を強くして創成塾に参加させてもらっていたんですが、私の資料の 4、緑色の資料ですが 1 枚めくっていただくと、なんで私が北海道に来たのというところで、元々私は北海道で自然学校を作りたいと思っていたんですね。そう思っているときに移住地を探していてたまたま声をかけていただいたのが津別町ということで、津別町のプロジェクトと方向性が一緒だなということでジョインをさせていただいたという経緯があります。津別町の取り組みというのが北海道の地域づくり交付金事業という補助金事業を使って、左側の青い枠の中に書いてあるのが目的です。この場でこういうことを言うと敵を多くしそうなのですが、よく行政で見かける文章です。当たり障りのない目標が書いてあったのですが、これは実現する価値があるなということで主な取り組みとしてずっと 3 カ年やってこられたんですが、真ん中で移住してきました。その時にふと思ったのがこれは予算がなくなったら続けてくれるのかなということです。実際に 2012 年の 3 月で補助金事業が終わり、どんな状況になったかというと、津別町としての目標が書いてありましたが、森林セラピー基地に認定されるという非常に素晴らしい成果がありました。森林セラピー基地というのはここでは割愛させていただきますが、森を使った公園のようなものを作りましょうということで確かに作れました。そこで活動するガイドさんも町内外で 50 名ほど生まれました。観光入れ込み数を 18.2 万人にしようと言っていたのですが、これは 6 割くらいしか達成できなかったのですが減ることはなかった。何が起きたかというと、補助金が終わった途端、基地はあります、ガイドやセラピストもいます、お客さんもいましたが、それぞれバラバラにいるだけだったんですね。基地があるだけ、ホテルがあるだけ、ガイドがいるだけ、ゲストが来ているだけで、何も中心になる組織がなかったので、私は学校が作りたいと思っていたので、これを利用しようということで NPO 法人を作りました。その背景が次のページに書いてありますが、これは興味のある人は読んでみてください。次のページです。実際に NPO 法人を作って、ネイチャーセンター、学校の代わりになるようなものを作り、そこを中心に宿泊のお客様であったり、基地の管理であったり、役場振興局との連携であったり、中間システムというような言い方をしますが、いろいろなソフトウェアとしてそこが機能して、ハードウェアとして回していく仕組みを作れるようにはなりました。今やっていることは森のこだまの目的、主な事業内容とありますが、あくまで目的を達成するための事業です。自然体験事業だったり、森林管理とか、物販飲食はまだできていないのですが、青と赤と黄色で書いてあります。青はできていることです。黄色はちょっとできているかなというところで、赤は全くできていないところです。これらを使って何をやりたいかといえば、北海道に移住してきて思ったんですね、地域の活性化をしたいなと。地域の人たちがすごく温かく受け入れてくれるんですね。この地域に何か恩返しはしたいし、2050 年を見据えると北海道が暗い話で、みんな消滅可能都市でということになっちゃいますが、僕は非常に大好きなところなので移住をしてきました。そう思っている人間はいっぱいいると思います。先ほど人口減少が北海道は本州の 10 年先を行っているというのがありましたね。津別町は 20 年くらい先を行っていている先進地なんですね。ここできちっとした取り組み

ができたら間違いなく北海道のモデルになるし、全国のモデルになるので非常にチャンスだな、先進地にいられるというのはメリットだなと思っております。それを利用して地域の活性化を観光の側面からできないかなということで今取り組んでいるのが、次の次のページですね。ノンノの森と勝手に名前を付けたのですが、このノンノはかわいい名前だねと言われるのですが、これはアイヌ語で花という意味があるノンノです。アイヌ語は北海道の宝だなと思っています。今やっている取り組みで私が使わせてもらっているのが、津別町にある地域資源の森、津別町が持っている津別峠展望施設ですが、これらの資源をどうやってマーケット、観光のお客様に届けていくのかをざっくりと描いてみました。この段階で何を資源として見るかが非常にキーワードになるというのが黒瀧先生や後藤さんからもありましたけれども、まずは地域資源を商品化しないといけないな、何を資源として見れるかなと。ホテルでお客様を受け入れていて非常に面白かったのですが、うちのホテルは森の中で何にもないと本州のお客様に言われるんですね。僕はいっぱいあると思っているんですが、いっぱいあるものの中に森があります。エゾシカがいっぱいいます。この 2 つを見たときに東京から来たお客さんが「素晴らしい森の中でエゾシカがいっぱい見られたよ」と喜んでくれたんですね。これは本当にあった話ですが、どことは言えませんが地元の商工会の女性部の方が来てくれました。同じように森とエゾシカがいたんですね。言われたのが「こんな森の中まで連れてこられて邪魔くさいエゾシカしかいない」とフロントで怒られたんですね。じゃあここで会合をしなければいいのになと思ってしまうのですが、どういう見方をするかで地域資源の見方は変わってしまう。たまたま私は津別峠で雲海を見せるツアーをしているのですが、これも始めたときは地元の方に「いつもある、ただの雲でしょう」と言われました。その通りなんですが、それでもツアーだけで年間 3,600 人くらいをガイドさせていただきました。そのくらい見方によって変わるものをどう資源化してそれをどう販売していくかが 2 番だと思います。地域としてどうマーケットに届けてさらにその先で受け入れをしなければいけません。3 番です。今まで観光は 1、2、3 番は重要視されていて、大手旅行会社や地域外の組織がこの部分をやっていたのかなと思います。観光客の視点で観光客の都合で使われて、どんどん疲弊させられるような仕組みが多かったのかなと思います。個人的にもう一歩進めて 4 番の使っている資源に再投資する仕組みを作りたいなと思っています。そのための NPO で、再投資というのは、例えば今は津別峠展望台を使わせていただいていますが、かなり老朽化しています。町の人たちがそこにお金を払って施設を直せるかというとほとんど町の人は来ないんですね。そんなところに何百万もかけて直すのであれば町の中にある特養にベッドを 1 つ増やした方がいいんじゃないかという議論が出て当たり前だと思います。そうであればそこを使っている人、利益供与者からきちんとお金をいただいてそのお金で直せるような仕組みが作れないのかなということで、使っていなかった時間、津別峠展望台は行政の者なので 9 時~5 時とは言いませんが、9 時~19 時でしか空いていない施設でした。それを早朝 3 時くらいから借りて 9 時までの間にツアーをやってみる。そこに家賃を払わせてくださいというお願いをしています。これも家賃を納めるという

のもなかなか難しくて、寄付金ならすぐ受けるよと言われるのですが、寄付金では意味がないんですね。きちんとした科目を立てて、収益として生み出せるような仕組みを作りたいなと思っています。こんなことで地域づくりというものを 1、2、3、4 番を大きなスケールで回せていければ間違いなく地域づくりになると思って取り組んでいます。そんな中で私が思っていることが、開発局には、先ほど黒瀧先生からもありましたが、ハードウェアの開発ではなくて、地域が主導となって回す仕組み、ソフトウェアを開発するという意味での開発というのも意味があるのかなと強く思っているのと、今日の開発局の資料の最後のページにある、地域に稼ぎをもたらす力とありますが、これは、もたらせ続ける力ですね。一瞬であれば誰でもできるので、それをどう再投資してもたらせ続けるのかなというと持続可能性は非常に観光においても重要だなと思います。後は知ってもらうことかなと思います。知られていないものはないのと一緒です。恥ずかしながら私も勉強しました。これに呼ばれたので買って勉強したのですが、国土のグランドデザイン 2050 を知らないと、こんなに素晴らしいことが行われていることすら気付かない。これはもっと知られるべきだなと思いますし、そのためには行政だけでなく我々も努力しないといけないんですが、地域づくりも一緒かなと思います。行政の悪口をいうのは簡単なんですが、津別のために一生懸命やってくれている人もいっぱい知っています。その人たちがなんで報われないのかというと、知られてないのかなというのが残念でならないので、知ってもらう仕組みというのも発信していけたらなというのが私の思っているところです。

有田：

皆さん全員が北見の人ではなく、僕だけがオホーツクの地に生まれてこの方ずっといる人間だということが分かりました。これからのこの地域をどうするかということを考えると、企業規模その他を考えても小さいところが多いので、スモールビジネスから始めるというしか手がないというのは日頃から感じています。この地に 60 年住んでいますけれども、農業機械の企業に入って、公設試験研究機関に入って、今大学にいって、一人産学官でいっているということ、農機具もやっていますので、農商工連携も一人でやっているようなところもありまして、実は経営もしています。そんな観点からみると、地元ならではのということで見えることがあるのですが、大学に行っているのであと 4 つで全県制覇というくらい見せていただいていますが、今ここにきて、元々ここにいたときより広く見えるなと思います。大学の先生はいろいろな地域から来ます。もちろん外国の方もいます。そういう意味では他の地域から見ていただいて、もっと遠くからの海外から見ていただいて、そういう面を 1 つの機関で持っているという面では大学は非常に有効な機関かなと思っていますのでそういう利用をしていただければと思います。この地域の特質というので雪がありましたけれども、うちも寒冷地工学をやっていますので札幌に行って除雪された雪を見て春になったら雪を溶かすのかと思うと、実は雪を保存することをやっていたものですから、もったいないと思います。それから何かを作るのではなくて、過去の歴史のものを使うというのも考

えていかないといけないのかなと思います。インフラの整備より、インフラの利用をもっとする方がいいのではないのかなと考えます。そんな偉そうなこと言っていますけれど、うちの大学の学生は 6 割方道外勢で、オホーツク圏は 10%か 12%くらいしかいません。就職は 5%くらいしかしてないので人口減にかなり寄与していると、これからは入った分くらいは残そうということで事業を進めようとしています。今まで農業系の話をしていたのでだいたい出切っていると思いますので、工学系の話をしますと、ものづくり日本の割にはそういった経験をしてくる小学生、中学生、高校生も含めて、入った時にドライバーもわからないということがあります。それの教育から始めるというとやってられない。そのくらいの次元です。しつけに近いような教育の部分も欠けてるところがあるので、勉強はできるけど経験が足りないという子が多くなっています。後輩はバカに見えるというのと意味が違う。本当に何もしていないという子が増えてしまうのでそういったところにも今後力を入れていかないといけないと思っています。工学部が出るところはものづくりのところで、かつては研究者を作るというイメージでいましたが、最近は技術者、高等技術者養成ということで資料の 2 枚目の右上に、技術者はいろいろな知識を持って、橋を作るとか、そういうところに大学の支援が入ってよりいいものができる。ただ作り上げていくのは技能者なので、ものづくり日本の中で技能者の社会的地位が低すぎるのではないかなと感じます。もちろん安心安全は大事ですけれどもそういったことが過度に入りすぎて、商品に対する地域力が発揮できない。例えば食品だと衛生管理とか機能性を謳うというのも、ものには限度がありますけども、医者に診てもらってこうしなきゃいけない、ああしなきゃいけないというのがあまりにも多すぎる。それから賞味期限、有効期限ではないのでそういったもの等、地域になじめないようなもの、地域性に特化したようなことも考えないといけない。そういうようなことに重要なことがあるのかなと思っています。そういうことを含めてスモールビジネスで、例えば食品を作るとしたら、一度提案したことあって却下されましたけれども、保健所の許可を全部持っているインキュベーション施設のようなものがないと実験的にものを作ることすらできない。そういうようなことも今後考えていただければこの地域から新しい食品加工もできる。あるいは先ほど言ったように作るんではなくて、学校がほとんどなくなるので、学校のいいところは給食の施設があり、保健所の許可が取りやすいというのもありますので、そういったところに力を貸していただきたいと思います。観光面では北見市は山の水族館で少し人気があるんですが、これも大学を利用してほしい 1 つですが、先ほども言ったようにいろいろな方が来られます。この中でたまたま道の駅で全国一位の群馬県川場村の方と知り合いになりまして、その方を呼んだり、こちらから派遣したりということも考えております。加えてそこにものを納めさせてもらうというのも考えています。群馬県は山の中で農産品は興味ないので海産物を納めることをイメージしながら、実際に納めています。そういうお付き合いから大学のルートを使っていただければということを、できる施設というようなところに置いておいてもらえればと思います。もうひとつ使ってもらいたいのはやはり学生です。先ほど言いましたように、よそ者、若者でバカ者はこれから作るとしても、

よそ者、若者は看護大学も合わせて 3,000 人近くあの地域にいます。いい生協があって需要と供給は満たされていますから、あの辺からあまり出ないですね。うちは男子が多くあっちは女子が多いので、今考えているのはそこで婚活をすると人口が増えるんじゃないかと変なことを考えていますけれども、そんなことを考えてもいいくらい若者がいるわけですから、先ほど黒瀧先生がおっしゃったように、そういうものを利用する場の設定なんかをしてもらえるとありがたい。それから山の水族館では氷を特徴とするように共同研究、実は銀河流星の滝もどきを作らせて、これは早く凍らせて遅くまで凍らせる。早くは実現しました。このようなこの地域に合った研究をされている方もたくさんいるのでそれを使える場を提供いただければありがたいかなと思います。最後の資料に載っているのですが、グライダー合宿をやりたいなと思っていまして、全国で 70 大学くらいに航空部があるんだそうで、もうすでに北大と宇都宮大が来ることが決まっています。これは実はうちの学生の発案でして、そういう発案も使っていただけるような仕組みがあればなということが希望としてあります。そういうことを先ほどのインキュベーション施設と雪の活用も含めて政策に盛り込んでいただけるようならお願いしたいです。いずれにしてもあまり難しい言葉を使わないでほしいなと思います。省庁は漢字をすぐ横文字にして使って仕舞いにはフランス語になってしまう。我々がやっているリエゾン活動もフランス語で、今はまた連携と、同じことを言っているだけなのでもっと日本語を大事にして文化を大事にした方がいいんじゃないかという気がします。一番最後のページに書いてある、おらが町をもう一度よく見ようというのは、実はダニエルカールさんが、なぜ日本の方は自分のところ、北見市はどういうところですかと聞くと何もないと答えるのですか、これはダニエルカールが会った日本人全員がそうらしいのですが、「何もないわけないじゃないか、こんなに素晴らしい自然があるじゃないか」と言ってくれたんですけれども、そういうことにある意味では謙虚だということだと思うのですが、与えられたものに満足する習性があるのか、もうちょっと誇りを持ってこの地域を言えるようなことを公的な機関でやらなきゃいけないんじゃないかと思います。ただし人を裏切るようなことはせずに、自分たちのことを自慢していくとひょっとしたら来てくれるようになるんじゃないかなと思います。そういう時に、農大さんもほぼそうですが、うちの学生は異邦人ですから、大学や大学の学生の意見をもっと聞くとこの地域のよさがわかるんじゃないかと思うんですね。そういう場の設定をぜひお願いできればと思います。本学だけのことを言うと寒冷地工学でもう少し何かいただけるとありがたいなと思います。もっとそういう場をうまく使わせていただければと思います。

5．意見交換

今：

時間がなくなってしまいましたのでこれまでの皆さんのご発言を受けて、ご意見など何

かございましたらお一方かお二方お願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

黒瀧：
　有田先生も最後に言われたのですけれども、ここら辺にはものづくりや企業化したいという風土が乏しいエリアですよね。インキュベート機能をやるような場を、都市や地域外から来られてできるような場を国土交通省が経産省と連携しながらでも作っていただければ違うと思うんですよ。そうするとそれを目指した上野さんのような方とかうちの卒業生の道山さんのような人が来て、そこで次の地域創成、地域活性化につながるような対応をして、それを大学と行政が連携して支援していくということにすれば、新価値創造、人材育成、稼げる社会になっていく。やはり地域雇用を作って行くということが我々共通して目指しているところなので、そこはぜひお伺いいただいたらいいのではないのかなと思います。これは 27 年間ずっと考えてきたことでございます。

有田：
　公共機関が遊休化してますので、学校や公民館などを再利用するということを重点に置いた考え方でいっていただけるといいと思います。そういう施設はおそらく人が集まるところにあるので、そういうものも利用していただければなと思います。新たに建てるのは今の時代は難しいと思うのでそういった利用も考えていただければと思います。

６．閉会

今：
　ありがとうございました。最後に国交省の澤田局長からよろしくお願いいたします。

澤田局長：
　出席いただいた皆様にはまだまだお話を伺いたいのに 2 時間は短いなというのが正直な感想です。時間がオーバーしておりますので短時間で申し上げたいと思いますが、今日は広範多岐に渡って非常に貴重なお話をたくさんお聞かせいただきありがとうございました。個々にお答えするというのはとてもできたことではございませんが、いくつか申し上げたいのですけれども、皆さんそれぞれ実働というか普段のご活動の中で取り組まれている非常にサジェッションに富む事例をお聞かせいただいて、我々の方はその一つ一つのこともちろんなのですが、そういうことの背景あるいは根っこに流れている考え方や思想を機能的に整理し直して、それを計画の中に反映させたいなと思っております。それと黒瀧先生のお話の中で、地域力が人間力を育むんだというお話、そのための強度に対する愛着、郷土愛というお話を新保先生が非常に強調されていた 12 歳までに勝負が決まるぞというお話も

ありました。実は時間の関係もあって横田の方からは細かな説明をしておりませんけれども、今日いただいたご意見の中の、我々も過去の 6 回半分の北海道総合開発計画でいろいろなことを掲げてきましたが、それを点検した中でなぜうまくいかなかったのか、ここの部分だめだよね、十年一日ではないけれども同じことを何十年も言っているねということもあるんですね。我々も今の計画案の中に盛り込みたいと思っているのは、インキュベートの機能を持った、先ほど上野さんからも出た、ハードだけではなくソフトもということもそうですけれども、そういった高次元の機能を持ったプラットフォームみたいなものに、少し主体的に取り組んで、場の設定、場の運営、こういったことに力を入れていくことに舵を切って行きたいなと思っているところでございます。もうひとつは、全国にいろいろな地域計画が動いていますけれども、考え方が日本国内で 180 度違うというのはまずいと思いますけれども、同じ思想、同じ思いであるならば、出口の見え方、アウトプットは違ってもいいんだろうなと思います。何を申し上げたいかというと、北海道の場合は青森以南と歴史的にも地理的にも状況が全く違うので、同じ考えに基づいても見え方が違うということは、ある意味必然だと思っております。これは決してダブルスタンダードということではなくて、北海道のベストの回答、こういったことを少しいい意味での差別化を図りながらこの計画づくりをしたいなという気持ちでおります。あとは先ほどの教育の話もそうですが、本来なら教育委員会や文科省の世界になるのかもしれませんが、我々が自分で言いだすと、お前たちまた余計なことをという話になりかねないのですが、やはりこういう場で背中を押してもらえるようなお話を聞かせていただきますと、大変ずるい考え方ではございますが、そういうニーズがすごく大きいので我々はできる範囲でのお手伝いをさせていただくという立ち振る舞いの話になってまいりますが、批判されがちな自分のところの庭だけという狭い了見ではなくて、主体的に目の届くところではないので、ここまでという話ではないのですが、積極的にやらせていただきたいと思っています。それと開発局や北海道開発建設部の開発というネーミングについてお話がありましたが、おっしゃっている意味は非常によくわかります。一つ技術的な話がありまして、いろいろな予算の確保に結びついている部分とかですね、今の制度の中で北海道の受けている特典ということにも密接にリンクするので、ここは別途先生にお話をさせていただければなと思っております。ただ、それは先生だけではなく我々の内部でもずっと問題意識は持っておりまして、昭和 25 年にできた法律なのですが、その時の開発の定義が資源とか広大な土地の利用という物理的なものを見ていた。法律の中で開発というのはこういうものだと定義しているものはないのですが、そこを先ほど申し上げた問題意識の中で人もリソースであるということで広げながら、これも抜本的な回答にはなっていないのですが、そういった意識も持ちながらあがいているのだということをご理解いただければありがたいなと思います。本当に今日はありがとうございました。これから一生懸命計画に反映させていただき、またこのようにご意見をいただいたので、今こんなふうに計画が進行していますということを、開発局や地元の網走開発建設部の方からご報告もさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今：

以上で「北海道価値創造パートナーシップ会議 in 網走」を閉会いたします。本日は皆さまご多忙の中、ご出席いただき大変ありがとうございました。

以上